

あけのほし 2012年6月3日

「不安を抱えて生きる」

菊田 行往

わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。

(ローマの信徒への手紙7章15, 17節)

キリスト教では、「罪からの解放」とか、「罪の赦し」ということを、大切なキリスト教の教えとして考えてきました。しかしこの「罪」ということが、一般の人からは理解し難く、キリスト教に今ひとつ近づけなくしている要因になっているように私は感じています。特に、「罪」という字から、犯罪などの倫理的な過ちを連想して、刑法を犯さない限り、自分とは関係ないものと感じている方も多いのではないかと思います。また、逆に、キリスト教というのは、人の過ちや欠点を数え上げ、断罪する恐ろしさによって人々を従わせようとしている宗教だと受け取られている方もいるかも知れません。

そこで、今回は、「罪」というものを捉え直してみ、少しでも理解しやすく提示したいと思います。

新約聖書に出て来るパウロという人は、この「罪」ということを、人間の性質である「むさぼり」というものに集約されると考えています。その「むさぼる」という言葉を辞書で引いてみると、「満足することなく、欲しがること」とあります。つまり、現象としては様々な形で出て来るにしても、その本質的なところでは、常に満足できずに、何かしらを欲し続ける特性が、人間には備わっているのだということ、パウロは言っていることとなります。人が満足できずに、何かしらを食欲に求めて行った時に、周りの人に対して様々な形で不利益を被らせて行くところに、人間の問題性があるわけです。たとえば、家族の中で、一人だけ自分の趣味に没頭し、時間も家計もほとんどを注ぎ込んで行くといった場合に、このことは良く理解できることだと思います。そのような他の家族を犠牲にしてまでも、自らの満足をむさぼって行くことを、キリスト教では「罪」として捉えているわけです。ただ、その場合、パウロは冒頭に挙げた聖書箇所を言います(ローマ7章15, 17節)。それは、自分の意志や力ではもはやコントロールが効かない、「罪」というものが自分の中に住んでいて、自分では憎んでいることをさせているのだと言うのです。この様なことは、何とも無責任に聞こえるかもしれませんが、悪いと分かっているながら何度も止めようとしているのに、どうしても止められない何かしらを抱えている人なら、うなずけるところがあるのではないのでしょうか。そして、パウロは、このような「罪」という「むさぼり」の特性が、実は程度の差こそあれ、すべての人間に備わっているのだと言います。

つまり、この「むさぼり」のために、他者を傷つけてしまうのは、一部の意志の弱い誰かや、特別な悪人に限定されることなく、私たち一人一人が抱える共通の問題だということです。「罪」という問題を、単に個人の倫理的な問題にするのではなく、人類共通の課題として捉えるのが、そもそものキリスト教の視点にはあるのです。

そこで、この人類共通の「むさぼり」ということを考えた時、興味深い話があります。それは、人間を何か他の動物と比べた時、一番近いのは、サルの胎児の時であるということです。母ザルのお腹の中にいる時の胎児を、そのまま大きくしたのが、人間にそっくりだということでした。そのことを指摘した科学者は、人間というのは他のどの野生動物よりも弱い存在で、ありのままの状態ですら自然の中で生きて行けない唯一の生物であると言っていたのが印象的です。もし、人間がサルの胎児の様な状態のまま、この世界に生まれてくるのであれば、それはもう、世界に対する不安と恐怖と、隣り合わせであるということが言えるでしょう。他のどの動物にも見られない、人間の「むさぼる」という特性は、この人間存在の弱さから出て来たものではないかと言うことが出来るのかも知れません。人間のように、倉庫や冷蔵庫に食料をため込んで、腐らせてしまう動物というのは、他にいないわけです（ルカによる福音書12章13-21節参照）。私たちが、それが悪いことだと知りつつ、また気づかない様に巧妙に理由付けをしてまでも、何かしらを「むさぼり」続けるのは、このようなこの世界に存在することへの不安と恐怖というものが、その背景にあるのだと私には思えます。この人間の不安と恐れを、冷静に把握して、それに対して正しく取り組んで行かない限り、キリスト教で言うところの「罪」という問題は、解決して行けないのだということです。私たちは、良い悪いは抜きにして、自分たちの意志の力ではどうすることも出来ない、「罪」というものが、自分たちの中に住み着いているということを、まず認めることが、とても大切なことなのだと思います。そしてその上で、私たちは、何か出来るでしょうか。

私はまず、先程の観察結果を土台として、「罪」や「むさぼり」を、個人や一部の人々の責任として、切り捨てないことが、なによりも大切なことだと考えます。確かに、犯罪や抑止しなくては行けない大きな悪というものはあります。ただその場合も、その個人々集団を、断罪するだけで切り捨てるのではなく、白らも同じ人類の問題を抱える一人として、関わって行くということが大切なことだと思います。同じ大きな不安を抱え、それが堪えきれないくらいその人にのし掛かった結果が、見える形での「罪」なのだという視点です。キリスト教は、本来、悪や罪を断罪するだけの、倫理的な清さを人々に押しつけるような宗教ではありませんでした。むしろ、そのような「罪人」と呼ばれる人々を、同じ苦しみを抱える者同士として、共に歩んだのです。キリスト教の本質には、人々の存在することへの不安や恐れを、切り捨てたり、排除するということはありません。そうではなく、その不安と恐れと共に、一緒に歩んで行くのがキリスト教なのです。そのような、本来のキリスト教に立ち返り、この不安の多き世界の中で、共に生きて行きたいと、心から願います。